

# ぶどう巨峰のハウス栽培における樹相診断基準

## 1 試験のねらい

巨峰の樹相診断は既に露地栽培で明らかにしたが、露地とハウスでは生育環境がかなり異なっている。そこで、現地のハウス栽培を対象として、結実及び品質にかかわる樹相診断を行いその基準を作成した。

## 2 試験方法

県内の主産地である岩舟町及び大平町のハウス栽培で、3～4年以上継続している樹令8～10年生の園を選定した。供試園数は昭和58年が7園、59年は8園で各園2～3樹を供試して樹相調査を行い、結実及び品質と樹相要因との関係を単相関及び重回帰分析によって検討した。新しょう長調査は開花期及び満開50日後に樹冠上の連続した40本の種枝上の全新しょうについて行い、新しょう伸長停止率と登熟率は30cm以上の新しょうについて、それぞれ満開40日後と落葉時に調査した。結実調査は新しょう調査を行った枝の着房果について粗、やや粗、適、密の4段階に分類して判定した。新しょう7節までの長さ①、7～14節の長さ②は14節以上に伸長した新しょうについて測定し開花期伸び率(②/①)を求めた。葉の調査は中ような新しょうを供試して開花期は第2花穂着生節位、満開50日後は基部から10～12節位の葉を測定した。

## 3 試験結果及び考察

### 1) 樹相と結実及び品質との関係

結実及び品質に関係する樹相項目の分類を表-1に示した。結実に関して単相関及び重回帰分析で有意性のある項目は開花期平均新しょう長、新しょう7節までの長さ、7～14節の長さ、開花期伸び率でいずれも(-)の要因であった。これらの中で特に平均新しょう長と開花期伸び率が重要と考えられた。糖度に関しては単相関及び重回帰分析で共通的に有意な樹相項目は(-)の要因として満開50日後の葉面積、(+)の要因として満開50日後の葉色があげられた。そのほか開花期葉色、満開50日後平均新しょう長、新しょう登熟率が(+)の要因として、開花期葉面積、新しょう伸長停止率が(-)としてあげられた。一粒重に関しては単相関及び重回帰分析で共通的に有意な(+)の要因として開花期の葉色があげられた。そのほかに(+)の要因として満開50日後葉色、同平均新しょう長、新しょう7節までの長さ、新しょう伸長停止率が、(-)の要因として着粒数があげられた。

### 2) 樹相診断基準

樹相好適範囲の設定は図-1に示したような方法で行った。年次によって好適範囲が若干異なるが、完全にずれることはないことから重複する範囲をもって診断基準とした。その結果は表-2のとおりである。この基準で結実に関しては開花期及び新しょうの伸びにかかわる樹相項目を重視し、品質に関しては満開50日後の項目、登熟及び伸長停止率を重視して診断する。

表-1 結実及び品質に関する樹相項目の分類

項目	(+)に作用する項目	(-)に作用する項目
結 実		開花期の平均新しょう長*
		新しょう7節までの長さ
		新しょう7~14節の長さ
		新しょう開花期伸び率*
品 糖 度	開花期の葉色	開花期の葉面積
	満開50日後の平均新しょう長	満開50日後の葉面積*
	満開50日後の葉色*	新しょう伸長停止率
	新しょう登熟率	
質 一 粒 重	開花期の葉色*	開花期の平均新しょう長
	満開50日後の平均新しょう長	着粒数
	満開50日後の葉色	
	新しょう7節までの長さ	
	新しょう伸長停止率	

注 \*は単相関及び重回帰分析で共通的に有意であった項目

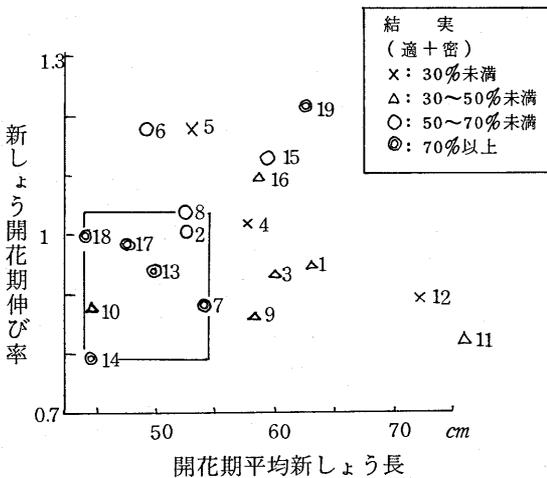


図-1 開花期平均新しょう長及び開花期伸び率と結実との関係(59年)

表-2 樹相診断基準

診 断 項 目	診 断 基 準
平均新しょう長 $cm$	44~47
開花期 葉色	カラーチャート 3.5~4.5
	グリーンメータ 1.05~1.22
葉 面 積 $cm^2$	180~190
平均新しょう長 $cm$	60~68
満 開 50日後 葉色	カラーチャート 5.5~6.0
	グリーンメータ 1.34~1.37
葉 面 積 $cm^2$	170~200
7節までの長さ $cm$	42~49
7~14節の長さ $cm$	41~46
新しょう 開花期伸び率	0.9~1.1
登 熟 率 %	60以上
伸 長 停 止 率 %	90以上

#### 4 成果の要約

ハウス栽培巨峰の結実安定及び品質向上には開花期の新しょうが長すぎず、開花期伸び率が小さいこと、満開50日後の新しょうは強めで、葉色は濃く、葉の形状はあまり大きくないことが重要である。(担当者 果樹部 松浦永一郎 青木秋広\* 田中敏夫\*\*)

\* 現栃木農業改良普及所

\*\* 現鹿沼農業改良普及所